

ヴェニスを憶う

えと文

飯田清毅

「水の都ヴェニス」とは、たびたび耳にした言葉だが、実際に行つてみた私の第一印象は、およそ都とは言いたくなく、何処を歩いてみても不思議に詩情を感じさせてくれた水郷であり、また、郷愁をそそる静かな美しい街だった。

土地が観光客の多いのは勿論だが、しかし不思議に騒々しさを感ぜさせられないでしつとりとした気持を与えてくれたこともパリに匹敵するくらいで、なつかしい思い出が私の印象の中に生きている。

殊に忘れられないのは、街の一角に立つてその家並を眺めていると所謂ヴェネチアン・レッドといわれる赤い壁の色が多く目について画興をそざられた。それに白い大理石の窓枠がはめられているのには驚かされたがイタリヤでは、木材よりも大理石の方が安いため庶民の住居にまでこんなに使われているそう。決して強くない淡い中に充分美しい調和をもっていたあの赤の壁の色は、いくたびか私の気持をそそり、十日余りの滞在中毎日のように画面の上でこの色彩にとつくんだものだ。

グランド・カナルから無数に水路が分れて

いて、その両側に古びた建物が立ち並んでいるが、ヴェニスのタキシードであるゴンドラを雇つてこの裏水路を廻つてみた。いくつかの小さなアーチ型の橋をくぐり、せまい水路をぬつて行く暗緑色ににごつた水は、重くよどみ、数百年を経た建物の水際には黒ずんだ水あかのような音が幾重にもついている。古色蒼然とした壁とこの暗くよどんだ水とは、何となく文明の世界から遠いもののようにさえ思えたが、そこにヴェニス独特の文化の歴史の美しさを見せている。ジョン・ラスキンをして世界で最も美しいところと嘆じさせたのも当然だと思えた。

ゴンドラは、曲り角にくると他の船との事故を避けるために船頭が「ホイ」と叫ぶ。その声が美しい余韻を残して水の上に消えてゆく。こうしてみる裏水路の此処彼処は、すべて太陽を避けた暗い裏街のような感じがするがこれは、観光客や、名店街にとり囲まれた有名なサン・マルコ広場あたりの明るい雰囲気とは全く違った感じである。しかし私にとつて、ヴェニスのほんとの情緒は、この暗い裏街の水路にこそ見出しえるものと思つた。

(行動美術会員)





天 野 宏

私の居た所は、ブラッセルから西の方約六〇キロにある昔のフランドル伯爵の古都ゲントで、ここより更に西に五〇キロ程行くとオステンドがあり、ここから英国に行く船が出ています。さて、ゲントの生活ですが、最初はプロフェサーフォトレイがさがしておいてくれた高校の物理の先生の下宿しましたが、余り面白くないので、少し下宿してから友人にさがしてもらってセイロン人の家にかわりました。そのセイロン人は混血で、まだ未婚の五十才くらいの肥えた人です。この下宿には私以外に二人のゲント大学の学生が下宿していました。一人はジョンといって、医学

部の六年生で六二年に卒業する学生です。彼のお父さんはアルメニア人で現在はデン・ハークに住んでいる経済学者だそうで、戦後永い間インドネシアの経済顧問をして彼地に住んでいたそうです。宗教はギリシヤ・オルトドックスだと言っていました。どうもアルメニア教会のようでした。お母さんはオランダ人で、時々息子の勉強を見にきました。また他の一人はフランス人といって、家はアントワープにあり、理学部物理学科の一年生でした。この人達以外にマルクという経済学部の大学院の学生が毎日夕食を喰べに来ます。彼は真面目な青年で、毎食事の時に十字架をきる熱心なローマン・カソリックの信者です。従って、夕食の時は、ジョン、フランス人、マルク、マダム・アソラバと私の五人です。ここで私は色々と彼等と話をし、ヨーロッパ人の物の考え方を知ったのです。その中で、特に興味のあるのはヨーロッパ人の躰の問題でした。

ある時、フランス人がアントワープに帰った時、ジョンが言いだしたのです。近頃の学生は―それは明らかにフランス人を指しています―ジャズを歌ったり踊ったりして、礼

儀作法は乱れ、人殺しまでするようになったということ。ジョンの思想は、ナチズムは正しい、あれこそ国民を正しい生活に導くものだ。デモクラシーは馬鹿のやることで、何時までたっても議論ばかりをして、結論が出ない。たまたま結論が出て、それは正義から程遠い妥協の産物であるというのです。それは私の考える所では、彼がヨーロッパに住んでいるアルメニア人、すなわち亡国の民であるということに原因しているのか、あるいは母親のオランダ人の血をとおしてドイツに親近感を持つているのか、そのどちらかによるのでしょうか。ちょうど、その時にマルクもいて、ジョンの言葉に賛成して、ゲントの町にもだんだんとジャズのカフェができてきた。そこでは学生がロックン・ロールを踊っているのが慨嘆した。ジョンは日本でも古い伝統があり、それはこの戦争の後どう変わったか、また貴方はヨーロッパに来てどう感じたか、と聞き出した。私は何んと答えてよいのか、全く迷ってしまった。それは、明らかに私の気持をいえば、彼等是不快に思うからです。なぜなら、結論的に言えば、ヨーロッパの文明は終わったということなのです。丁

度アテネの街路をトルコの兵隊が行進するさまをアテネの市民が眺めているようなものです。それは、ベートーベンのトルコ・マーチから思い出されたのです。アテネの街から眺められるアクロポリスの丘には、すばらしい大理石の神殿が南国の太陽に輝いているが、今その街路は、かつて自分達が征服した異国のその国の兵隊がこを彼等自身の国のような顔をして行進している。文明は移って行くものなのだ、ヨーロッパは過去のものになりつつある。実を言うとヨーロッパ人は特にベルギー人そしてフランス人も、あるいはドイツ人もそうであるが、アメリカに対してある劣等感を持っています。それは軍事的にというだけでなく、経済的にもそして生活様式についてもそうです。しかし、それは多くの場合逆の形で表現されています。事実、あるとき私が研究室の友人の家に行った時、彼の台所には皿洗機（アメリカ製）が置いてあって、それは洗滌も乾燥もスイッチ一つでできるのです。彼はそれを見せ嬉しそうな顔をしてその機能を説明してくれました。それに反して、私の下宿の便所は水洗ではなく汲取り式なのです。また、レーディオ・ルクセン

ブルグは毎日全ヨーロッパに向け、アメリカのジャズを放送していて、何れのカフェでもそれを聞くことができます。私はジョンの質問に答えて、日本でも米国のために、古い習慣が失なわれ、青少年はジャズに踊り狂っていると答えた。その時彼は日本はまだアメリカに占領されているのだからなあといってくれた。

さて、ジョンの話の中で私が日本人として最も強く感じたのは、ヨーロッパの親達がどのような気持で子供を愛しているかということであった。彼の言葉によると昔のヨーロッパの親達は子供を愛するのに、無茶苦茶な愛し方をしないで、子供が大きくなった時に社会に出て立派な生活ができるように愛し、躾をしてきた。これは永い社会生活の間に、彼等が身にしみて知った愛情である。それが戦後に混乱したのだ。今の親達は子供を野放しにしている。丁度ジャングルに放たれた野獣のように子供達は成長して、自分自身を律することができず、オートバイで音をたてて暴走したり、メスで他人を傷つけたりする。昔の親達は子供の躾はとても厳重にし、鞭で子供の尻を打つのは日常の茶飯事のことだっ

た。しかし、今それをすると、親が暴力を振ったといつて攻撃される世の中になっている。私は彼の話聞きながら日本のことを思い浮べた。日本の母親達は子供に対する愛情を何にか感違いしているのではないか、赤ん坊の時から、赤ん坊が泣けばお乳をあたえ、子供になれば、泣けばお菓子やお玩具をあたえる。それは子供の願うことをなんでもかなえてやるのが親の愛情だと思っているからである。これはある意味で美しい習慣かも知れない。しかし、子供の方から見ると、自分が我儘を言えばすべてその通りになるということを条件反射的に教えられていることになる。それが現代の青少年の無軌道の原因になっているのではなからうか。これは昔の道徳を教えるも無駄で、現在の親達に真の意味の子供に対する愛情を教えなければならぬ。それは子供が大きくなって本当に正しい社会生活をできるように、赤ん坊の時から泣いたらといって直ぐに食物を与えないようにしなくてはならない。それが本当の意味の子供に対する愛情なのである。私はジョンと話をしながらそれを感じたのである。（工学部教授、生物学）